

旅は道連れ、世は情け

～女性ライフサイクル研究所、二十周年を迎える

前夜 ～女であること

村本 邦子

前回、女であることにあまりに満足していたため、女性問題に関心を持ったことがなかったと書いた。それが、「女性の視点で女性のサポートを！」と、女性ライフサイクル研究所を立ち上げることになるのだから、やはり、スタートラインは、女であることへの気づきであったと思う。今回は、女であることについて書いてみよう。

個人的に私を知っている人は笑うだろうが、私はそれまで、自分を女らしいと信じていた。女の子らしいピンクのリボンやヒラヒラしたワンピースが大好きだったし、女の子がやりそうな手作りも好きだった。ひと冬で十枚もセーターを編んだり、自分でデザインしたセーターの写真を撮りためて、出版社に送ろうと目論んだりもした。私にとって、「女らしさ」とは完全なもの

であり、そこから一般に言われる女の子の属性を差し引いたものが「男らしさ」だと考えていたような気がする。だから、女が弱く馬鹿なものだとは知らなかった。研究所を始めて以後の話だが、女であることが自己否定と結びついて苦しんできたというフェミニストから、「この社会で自己肯定している女と、自己否定している女とでは、どちらが病的と言えるのか？」という問いを突き付けられて唖ってしまったことがある。たしかに、ある意味で、私はこの社会から遊離していたし、ある側面を否認して見ないようにしてきたのだろう。

そんな私が女であることの意味を理解するようになったきっかけは、アドリエヌ・リッチの『女から生まれる』（晶文社）との出会いである。男性中心の父権社会のなかで、どんなふうに

お産が医療に組み込まれ、女たちの力が奪われていったのか、制度化された母性によって、いかに女たちの自由が奪われ、母性が理想化されると同時に闇を抱えることになったのか、緻密に歴史をたどりながらも、さすがに詩人らしく、実に生き生きとリアルに描かれていた。眼からウロコが落ちるとはまさにこのことだろう。一挙に視野がクリアになって、それまで断片的に不思議に思っていた謎が解けたように感じたものだ。

ちょうど、私は、息子を自宅で産んだところだった。もともと、お産の仕方について、強い主張があったわけではない。たまたま、母と妹が自宅出産し、「楽でいいよ」と勧めてくれたので、「それなら」ということになっただけである。私は4人きょうだいの長女だが、母は、私を含む3人の娘を病院で産んだ後、「もう4回目慣れてるし、どうせ医者は何もしてくれないから」と、末の弟を自宅で産んだ。当時、僅かではあったが、まだ自宅出産を選ぶ人もあって、お産婆さんなる人がいた。「家で産む方がずっと楽だわ」というのが母の感想だった。そして、6つ年下の妹が一足早く子どもを産んだ時、たまたま弟を取り上げてくれたお産婆さんが現役でいたものだから、妹も自宅で子どもを産んだ。さすがにその頃には、「自宅で取り上げるのは実に十年ぶり」ということだったが。

そんなわけで、自宅出産を経験し、その後、子育て仲間とお産の体験を語り合ううちに、いかに自分が恵まれたお産をしたかが、ひしひしと感じられるようになった。陣痛促進剤が盛んに使われていた時代である。「お産のことは2度と思い出したくないし、2度と産みたくな

い」という声もあった。自宅出産では、日常的なかにお産があり、お産婆さんや母や妹などお産を体験している身近な先輩女性たちの経験と知恵、まだ体験していない妹や姪など後輩女性たちの応援など、女たちの暖かいつながりのなかで、しかし、産まされるのではなく、産むのは自分で、最終的には、男も女も心を合わせ生まれてくる命の力を信じ、あとは天命を待つしかないということを受け入れ、腹を括るプロセスが必要とされた。これは、母となるためのイニシエーション(通過儀礼)であり、女としてのエンパワメントであり、それを経たからこそ子どもとの幸福な出会いがあった。

当時、私は、精神科外来での非常勤カウンセラーをやっていた。すっかり仕事をやめてしまおうかという思いもあったのだけど、夫が「家の中で家事や子育てをする大変さと、外で働く大変さはきっと種類の違うものだから、完全に役割分担するよりも、少しずつでも分かち合う方が、互いの大変さを理解できて良いのではないか」と言うので、なるほどと感心して、細々ながら仕事を続けることにした。もともと、私は、経済的自立や社会的地位のようなものにこだわりがなかった。大学生の頃から自活していたので、必要があれば食べていける程度に稼げるだろうこと、収入に合わせた生活をする自信もあった。とは言え、今はなかなか厳しい時代になったと思うし、お金についての考え方は事業を始めて変わっていくので、これについてはまたいずれ改めて取り上げるつもりである。

私はもともと子どもに興味があって、おもに子どもの臨床をやっており、勤めていたクリニックは思春期外来が中心だった。やるからに

は全力投球するタイプである。心理テストでは相当数のケースに当たり、ロールシャッハだけでも3年で数百例はやった。当時は、「登校拒否」と呼ばれていた思春期ケースのうち、あまりしゃべらないタイプの子どもたちが私のところに回ってきたので、とにかくたくさんケースをこなすなかで、時代精神と臨床という視点を持つようになった。この時期に考えていたこと、つまり、「何不自由なく育てたのになぜ？」と親たちが嘆く子どもの問題の背後にある与えられすぎた子ども時代の弊害、そこには、戦後のまだ貧しかった時代には、白ご飯とか新しい文房具とかが幸せの象徴であり、子どもの幸せを願う親心が子どもの欲求とずれてしまっているという世代間のギャップが見え隠れしていた。

あまり大きな声では言えないが、(子ども時代をのぞけば、)私の人生の中で一番暇だったのが、子育て中心のこの時期だった。プライベートで子育て仲間が増えていったので、毎週、自宅に仲間を招いて、一緒に子どもを遊ばせながら、ワイワイガヤガヤやるような会を始めた。一緒に編み物をする会とか、子どもの発達を学ぶ会など、思いつきで設定して、今の生活からはもはや想像しにくいけど、お客さんがいつでも来れるほどに家が片づいていて、お昼、大きなお鍋でカレーやシチューを作ってふるまうなどしていた(本来、私はそういうことが好きなのだ)。

また、もともと勉強好きなので、公民館の託児付き講座に足を運んだり、たまたま引越して駐車場が当たったからと教習所に通って免許を取ったり、赤ちゃん連れでも受け入れてくれる英会話レッスンを受けに行ったりと、

暇にまかせ(じっとしていれない性格だからとも言えるかもしれない)、この時とばかり、やり損ねていたことをあれこれやった。何しろ学生時代は勉強とアルバイトばかりやっていたので(いや、考えてみると、お茶やお花や和裁などお稽古ごとくもやってたな...)、ふつうの人たちが学生時代にやることを子育て中にしていたのかもしれない。いずれにしても、大きな副産物があった。あちこち子連れで出回っていたので、英会話の先生たちが、まだ1歳にもならない息子を、「かわいい、かわいい」と引っ張りだこでかわいがってくれたり、子育て仲間とわいわいがやがや集まって話し込んでいたのは、振り返って意味づければ、間違いなく、自分自身の子育て支援になっていたはずだ。

百貨店で開かれる子育てサロンにも出入りしたりするようになった。このあたりの子育て仲間の拡がり方については、メセナなど当時の時代の動きを反映しているのだから、次回、取り上げてみたいと思っている。いずれにしても、こうしてごくふつうの女たちとつながるなかで、現代の子育て事情がよく見えるようになった。当時の日本社会は、まだ認識していなかったけれど、核家族での子育て、母性神話、子育て体験のなさや不安、個が確立してしまった女性にとって、母役割、妻役割だけでは生きていけるはずがないのに、それをしようとするものだから、ストレスがたまって、子どもの操作や支配になりかねないことなど、いろんなことが見えるようになった。そんな状況のなかで、リッチと出会ったのである。個人的なことは政治的なこと。

それから2人目を妊娠し、出産の3カ月前にクリニックのクビを言い渡された。考えてみ

れば、ひどい話である。同僚たちもとても気の毒がってくれて、「もう一度話をしてみても、自分からも頼んでみる」などと言ってくれたり、「訴えたらいいのに」と怒ってくれたりする人もいた。ただ、自分にも非があると思ったし、そこまでして是非ともそこで働きたいというほどのコミットメントが欠けていたのだと思う。本当のところ、そのクリニックで働くのは楽しかった。開設時に雇われたので、創り上げていく面白さがあったし、かなり癖のある院長ではあったけれど、私の働きぶりを評価してくれて、好きにやらせてもらっていた。箱庭が欲しいと言えば買ってくれたし、給料もどんどん上げてもらったような気がする。アットホームな雰囲気、手のあいた者がお昼を作って皆で食べ(作るのは女たちだったが、院長もよくお手製の漬物を作ってくれたものだ)、息子がどんなにかわいいかという私の自慢話を、からかいながらも皆よく聞いてくれた。

私の非とは、1人目の出産のときには、3カ月の産休ももらったので、2回目も同じように行くとばかり思い込んでいて、その時のクリニックの外的状況も影響しているが、十分なコミュニケーションをとる努力を怠ったということである。その時は、急にクビを言い渡されて腹が立ったので、売り言葉に買い言葉みたいなこともあり、とにかくやめることになった。人に経過を説明するうえで、詳しく説明するのが面倒なので、「クビになった」とは言ってきたが、経営者の立場を考えれば理解できることなので、自分の中に被害感が残っていない。それに、ここでクビにならなければ、間違いなく女性ライフサイクル研究所が誕生することはなかったはずである。

急に職を失ってどうしようかなと考えたときに、ふと思い浮かんだのが、家でやっている子育てグループをもう少し公的な形でやるのはどうだろうかということだった。その頃には、クリニックで見てきた子どもたちの抱える時代的な課題と、子育て仲間たちから見えてくる母親たちの抱える時代的な課題がはっきりとつながって見えていたので、自分で勝手に「予防臨床心理学」という命名をして、子どもが問題を抱えてから関わるよりも、もっと一般の母子への支援をすることの方が話は早いのではないかと思うようになっていた。おそらく、当時、関わっていた子育てサロンのイメージもあったし、クリニックでの経験から開業臨床のイメージも形成されつつあったのだと思う。とにかく、子育てしながら自分のペースで働くには、ワンルームでも借りて自分でやるのが一番便利なのではないかと思ったのである。子育てグループなら自分も子連れでできるし、クリニックに勤めていた週1くらいは、子どもを夫に見てもらって個人のカウンセリングをするのも良かろうと思った。

こんな経過から、研究所をスタートさせることになったのは、娘が3カ月の時である。今回、女であることを取り上げたのは、それが、「心」や「個」への関心から、外から人を規定するシステムや社会という次元へと自分の眼が開かれることになった重要なテーマだからである。そうは言っても、研究所をスタートさせた頃の私の女であることへの理解は、まだまだ浅薄なものだった。むしろ、その後、耳を傾けることになる女たちの物語に圧倒される中で、それまで自分には見えていなかったものが見えるようになっていった。